慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プラトン『パイドン』における魂の不滅性のための「最終論証」について
Sub Title	On the last proof of immortality of the soul in Plato's Phaedo
Author	串田, 裕彦(Kushida, Hirohiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2010
Jtitle	哲學 No.124 (2010. 3) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, we analyze the 'last proof' of the immortality and the imperishability of the soul in Plato's Phaedo by reviewing modern interpretations of it. We maintain that, as some critical commentators claim, there is surely a kind of confusion in the last proof, but that it is not concerned with metaphysical hypotheses as they discussed but can be characterized as Plato's fluctuation between the observation of the actual world and the investigation purely in logos. In addition, we propose a possibility of interpretation that in his attempts to overcome such confusion, Plato had developed the theory of the soul in the Republic and the Phaedrus, where the essence of the soul is stated.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000124-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

プラトン『パイドン』における魂の不滅性のための「最終論証」について

串　田　裕　彦*

On the Last Proof of Immortality of the Soul in Plato's *Phaedo*

Hirohiko Kushida

In this paper, we analyze the 'last proof' of the immortality and the imperishability of the soul in Plato's *Phaedo* by reviewing modern interpretations of it. We maintain that, as some critical commentators claim, there is surely a kind of confusion in the last proof, but that it is not concerned with metaphysical hypotheses as they discussed but can be characterized as Plato's fluctuation between the observation of the actual world and the investigation purely in logos. In addition, we propose a possibility of interpretation that in his attempts to overcome such confusion, Plato had developed the theory of the soul in the *Republic* and the *Phaedrus*, where the essence of the soul is stated.

* 慶應義塾大学文学部，理工学部非常勤講師（論理学），博士（哲学）

はじめに

プラトン対話篇『パイドン』において，刑に処せられる直前のソクラテスは，魂の不死にして不滅であることの論証を試みる．そのうち特に「最終論証」といわれる部分の論証(102a–107b)は，現代の哲学者達から様々な批判にさらされ続けており，すこぶる評判が悪い．他方，批判から最終論証を擁護しようとする哲学者もいる．最終論証は，魂が不死であることを示す前半部と，不死であるだけでなく不滅でもあることを示す後半部とから構成されるが，批判的な論者は，この前半部と後半部とでは魂の身分に関してギャップが存し，結果，結論の導出を含む後半部は全く証明になっていないことを主張する．逆に，弁護する立場の論者は，そのようなギャップは存在せず，魂の扱いは一貫しており，証明に不備はないと主張する．本稿で我々は，批判者達がソクラテスのあげる様々な一般原則をそのまま受け取ろうとしないことを指摘し，しかし，ソクラテスの最終論証には，やはりある種の混乱が認められることを主張したい．種々の一般原則を字句通りに理解することを通じてかえって浮かび上がるその混乱は，ロゴスによる論証と現実世界の観察との間のギャップであり，解釈者達のいうようなギャップとは根本的に異なるものである．また，プラトンは続く対話編『国家』『パイドロス』において，実際そのような混乱を克服しようとする中で己が魂論を整備していったという解釈の可能性をも示唆してみたい[1].

1. 魂の不滅のためのソクラテスの「最終論証」

いわゆる想起説によって，人が生まれる以前から魂は存在していたこと

[1] テキストは Oxford Classical Texts, Platonis Opera, I, II, IV（J. Burnet による編集）を用いた．訳出に際しては，種々の邦訳，英訳を参考にさせていただいた．

が証明され，対話者間でも同意が得られた後，しかし，肉体が死んだ後にも魂は滅びずに存在し続けることはどのように保証されるのか，といった問いを対話者ケベスがソクラテスに投げかける．この問いを「容易ならぬもの」として重大に受け止めたソクラテスは生成，消滅及び存在全般にわたって，その原因 (*αἰτία*) を究明せねばならないといって，自身の若かりし頃の自然学への傾倒と失望，及び，アナクサゴラスの説への期待と失望の経験を語る．そして，「次善の方法」として，ロゴスの中に (*ἐν λόγοις*) 最も確実と思われる前提を立て，その前提の下に原因を見出していく方策を提起する．その前提とは，次のものである：「美そのものが何かしらそれ自体で存在しており，そのことは，善や大，その他すべてについても同様である」(100b5–7)．次に，この前提に続く事柄として，もし美そのもの以外に何か美しいものがあるとすれば，それが美しいのは，かの美を分有するからであり，それ以外の原因ではあり得ない，という原因の把握が述べられ (100c4–6)，対話者も同意する．すなわち，ある事物がある性質を持つ時，その事態は，その事物がその性質に対応する形相を分有することによって成立しているという把握である．

以上のような形相に関する前提とその下での原因の把握が語られた後，さまざまな例を挙げながら，いくつかの一般的な原則が対話者間で承認されていく（102a 以下）．通常そこから「最終論証」が始まるとされる．論証全体は，魂の不死であることを示す前半 (102a–105e) と，不死であるだけでなく不滅でもあることを示す後半 (105e–107a) とに区分できる．本稿では，便宜上，前半を「不死論証」，後半を「不滅論証」と呼ぶことにする．以下では，それぞれの要約を示した上で，それに関わる諸解釈を検討していく．

1.1　不死論証について

不死論証では，次の諸論点が順に対話者間で確認されていく．

(1)　形相が反対を受け入れないだけでなく，事物や人間の持っている

それに対応する性質も，反対を受け入れない．例えば，大そのものが小を受け入れないだけでなく，我々のうちなる大も小を受け入れない．(102d–103c)

(2)　ある形相そのものではないが，存在する限り常にそれを分有し，対応する性質を持つ事物も，同じ名で呼ばれるべきである．例えば，火は常に「熱い」と呼ばれるべきであり，雪は常に「冷たい」と，三は常に「奇数」と呼ばれるべきである．(103c–104b) そして，そのような何らかの性質を常に持っている事物は，それと反対の性質を決して受け入れようとしない．例えば，火は冷たさを受け入れてなお火であることはなく，冷たさが迫ってくると，逃げ出すか，滅びるかのどちらかである．又，雪は熱さと反対ではないのにも関わらず，雪であるままで，熱さを受け入れることはできず，熱さが近づくと，逃げ出すか，滅びるかである．(104b–c)

ここまでを不死論証の前半部とし，以下を後半部としよう：次に，「それ自身は互いに反対ではないが，互いに他方を受け入れないもの」の定義が二度試みられる．ここで第二の定義を引いておこう：「それがどこに行くにせよ，反対の何かをそこにもたらすものがあるとすれば，そのもたらすもの自身は，もたらされたものと反対のものを受け入れることは絶えてないであろう．」(105a3–5) そして，新しい原因の考えが述べられる．すなわち，ある事物がある性質を持つ原因について，以前のように，対応する形相の分有によって答えるのでなく，その性質を常にもたらすものが，その事物を占有するからであるとする把握である．例えば，あるものが熱くなる原因は，以前の答え方のように，その物体の内に熱が生じるから，とは言わず，火が生じることを挙げる．又，身体が病むのは，そこに病が生じるとは言わないで，熱が生じるからと答える．又，ある数が奇数となるのは，そこに奇数という性質が生じるとは最早言わず，一が生じるからと答える．そして直前の諸例に続く例として，魂の場合が取り上げられる：身体が生あるものとなるのは，そこに魂が生じるからである．ところ

で，生に反対のものとしては，死がある．よって，魂は，自分が常にもたらす生と反対の関係にある死を決して受け入れない．つまり，魂は不死（アタナトス）である．これで魂の不死であることの証明が終わる．

このように魂が不死であることは，「互いに反対でないのに，互いに他方を受け入れないもの」に関する定義，及び，新しい原因把握の一つの事例として導かれる．その定義は前に言う通り二度なされるが，解釈者たちの間で問題となるのは，そのうちの第一の定義である．

> 「それらが何を占有しようとも，ただそれ自身のイデアだけでなく，また常にそれと反対の何ものかのイデアをも，強いて持たせるもの，これが求めるものではあるまいか．(*τάδε εἴη ἄν, ἃ ὅτι ἂν κατάσχῃ μὴ μόνον ἀναγκάζει τὴν αὑτοῦ ἰδέαν αὐτὸ ἴσχειν, ἀλλὰ καὶ ἐναντίου αὐτῷ ἀεί τινος;*) (104d1–3)[2, 3]

以下ではこれを単に第一定義と呼ぶ．ここで，占有するものは，さしあたり，ある性質であると考えられる．それは，第一定義の直後，「三という性質が何かを占有すると，そのものには偶数という性質は決して入ってこない」といったことが語られることからもわかる (104d5–7)．そして，この一般的定義を魂に適用しようとするプラトンは魂を一種の性質として扱っていると解釈できる．ここから Hackforth は次のように主張した：プラトンはしかし，後半の不滅論証では明らかに，魂については，冷の性質を持ち熱を受け付けない雪と同じレヴェルで[4]，何らかの性質を有する

[2] 多くの解釈者は *αὐτῷ* を省略して読む．([Gal] p. 236, note 71 参照．) Burnet は，これを「攻めてくるものと（反対の）」と解釈している．([Bur] pp. 119–120)

[3] ここでの「イデア」は，内在的な性質を表していよう．

[4] 細かく言うと，不滅論証では，「雪は常に冷たい」という言い方はなされない．しかしここで魂とともに取り上げられる事例は，雪，火，三であり，これは 103c–104b において，「何かが常にある性質を持つ」ことが語られた際と全く同じ例になっている．

ようなある実体的なものとして想定している．こうして，不死論証と不滅論証とでは「魂の論理的身分」(the logical status of soul) に関する（性質から実体へという）移行があると厳しく批判するのである．（ここには，同一のものは常に同一の仕方で取り扱わなければならない，という考えが前提されているといえよう．）

一方，魂は正当に実体として扱われていると主張する解釈者達は，第一定義に関して異なる解釈を施す．すなわち，そこで定義されるものを，上のように「占有するもの」とはとらずに，「占有されるもの」ととる（Tredennick, Schiller, Gallop の解釈）．例えば，Gallop は，第一定義の箇所を次のように訳す．‘Would they, Cebes, be these: things that are compelled by whatever occupies them to have not only its own form, but always the form of some opposite as well?’ ([Gal], p. 58.) ここで，*ἅ* を *ἀναγκάζει* の（主語とはとらずに）目的語と解釈している訳である．そのように解釈すると，プラトンが第一定義の後に出す三の事例に合致するのである．そして，この第一定義の適用範囲から魂は除外される．というのも，このように解釈された第一定義に魂が適用されると，Schiller の論じたように，「魂の宿った身体には，決して死は入ってこない」，つまり，「身体が不死」という明らかにばかげた結論になるのである．そして，「占有する」の使い方は，第一定義におけるものから，魂に適用される第二定義までで，自然と変化している，と解釈する．このようにテキストを読解することにより，プラトンは実際，三は性質だが（このことはテキストにはっきり記述されている），魂は実体と考えていたことを論証しようとする．また，Frede は，後の不滅論証におけるプラトンの魂の実体としての扱いとの整合性を重視する．そして，不死論証における魂も同様な扱いたるべきである，と主張する．不滅性が示される魂は，自ずと実体的なものでなければならず，従って，その魂は不死論証においても同様にある実体であるはずである．もし，プラトンが（不死論証で）性

質のみを語りたがっていたとすれば，火や雪といった明らかに性質ではない疑わしい例は避けることができたはずである．ただし，Frede は，Schiller などと違い，様々な事例の身分の違いにもかかわらず，「占有する」の用法は一定であるべきであると考える．よって，第一定義でも「占有するもの」が定義されている．しかも，占有するものは，性質でも性質を持った事物でもどちらでもよく，ただ「それらは，占有されるものにそれら自身性質を強いる」と述べているに過ぎない，と Frede は説明する．こうして，様々な例が適用可能であるように，「占有する」の用法を一定の仕方で，しかも広くとるのである．

このように，批判的立場に立つ Hackforth は，「占有する」が適用されるのは，魂を含め，性質のみである．しかるに，不滅論証では魂が実体の扱いを受けており，そこにギャップがあるとプラトンを批判する．一方，Schiller は，異なる対象に応じ「占有する」の用法が変わっていると解釈することによって，プラトンは一貫して魂を実体と看做していた，とプラトンを擁護する．そして Frede は，異なる対象に適用できるように，「占有する」の用法を広くとろうとし，同じくプラトンを擁護する．三人とも，プラトンの提示する一般原則そのものより，個々の事例である諸対象の「存在論的身分」(Frede) の相違を重視していると言える．ただし，Frede だけは，適用される対象の身分に関わらず，プラトンの一般原則が何を言おうとしているのかに目を向けはじめている点は，注目に値する．

「互いに反対でないのに，互いに他方を受け入れないもの」に関する二つの定義がなされた後，新しい原因把握が提示され，不死論証の結論である「魂は不死」が導かれる．テキストでは，その定義と原因把握とによって，結論が導かれている．注意すべきは，まさにその定義と結論の部分との間の位置に，新しい原因の考えが述べられていることではないだろうか．というのも，形式的には，前の定義から直接望まれる結論は出てくる

のである：魂は，自分が占有するものに，自分の性質のみならず，生をも常にもたらすようなものである．よって，定義により，そのような魂は死を決して受け入れない，つまり不死である．しかし，定義からすぐに結論を出さずして，プラトンは，わざわざ新しい原因の考えを提示するのである．物が熱くなるのは，そこに火が生じるからである．又，身体が生あるものとなるのは，そこに魂が生じるからである．それらを，結論を出しやすいように言い換えると，次のようになろう．物が熱くなるのは，その物を火が占有し，火の性質のみならず，熱をも常にもたらすことが原因である．又，身体が生あるものとなるのは，それを魂が占有し，魂の性質のみならず，生をも常にもたらすことが原因である．

ここでプラトンは，「物が熱くなっている」あるいは「身体が生あるものとなっている」という現実の事態を想定した上で，その原因を遡って探究しようとしていると解される．そして，それぞれの与えられた現実の事態において，焦点となっている物や身体といった「占有されたもの」とそれを「占有するもの」とは，いわば一体のものなのである．つまり，前者は後者によって既に占有されているのである．このような場面で，解釈者たちの間で問題となっていた第一定義の箇所をどう考えるべきか．まずそこで定義されるものは，我々は，Schiller, Gallop, Treddenick とは違い，Hackforth 等と同様，「占有するもの」と考える．なぜなら，Schiller の論じたように，「占有されるもの」が何らかのものを受け入れないとすれば，魂に占有された身体は，死を拒否することになってしまうからであり，しかも，第一定義の適用範囲から魂を除外するのには理由がないと考える．そこでプラトンは明らかに一般的な定義を指向していると思われるからである[5]．しかし，「占有されるもの」は「占有するもの」により既

[5] プラトンが「X とは何か」というような一般的な定義の問題と，X の個々の事例とを区別することにこだわったのは周知の事実であろう．『メノン』71e–72e，『テアイテトス』146c–147c 参照．

に占有されているという一体性を考慮すると，両解釈の違いは減じることになるだろう．すなわち，「身体に宿っている魂」と言うべき所を「魂の宿っている身体」と言ってしまってはならないというようなそれこそ言葉遣いの問題に帰するであろう．

又，第一定義に関して，解釈者たちの間で議論される今一つ別の論点にも言及しておこう．それは，占有するものによってもたらされるものは，「占有するようになるある性質」なのか，あるいは，「占有されるもの自身の性質」なのか，という問題である．Treddenick, Schiller, Gallop, Bostock 等は前者の解釈をとり，Hackforth 等は後者の解釈をとっている．これはテキスト上では，*τὴν αὑτοῦ ἰδέαν* (104d2) の *αὑτοῦ* が何を指示しているかの問題である[6]．定義されるものは複数形 (*ἃ*) をとっているが，*αὑτοῦ* は単数形である．従って，定義されるものを「占有するもの」と解した場合には，文法的には後者の解釈が自然である．しかしその場合，占有するものによってもたらされる性質は，占有されるものの性質であることになり，一見奇妙な事態になるのである．例えば，身体を占有する魂によってもたらされるものは，身体の性質なのである．ここから，例えば Bostock は定義されるものは「占有するもの」であるが，それによってもたらされるものもやはり「占有するもの」自身の性質と解する．しかしここでも，既に占有するものに占有されたものにとって，占有するものはまさに一つの自分自身の性質であると考えて不都合はないであろう．つまり，何らかの与えられた現実の事態を問題にするプラトンの場面

[6] この点と，先に議論した *ἃ*（第一定義で定義されるもの，104d1）の指示対象の問題に関して，諸解釈を論者ごとに整理すると以下のようになる．

	ἃ	*αὑτοῦ*
Archer-Hind, Bluck, Hackforth	占有するもの	占有されるもの
Burnet, O'Brien, Bostock	占有するもの	占有するもの
Gallop, Schiller, Treddnick	占有されるもの	占有するもの

を考慮すると，内にあるものを性質と看做せば，両解釈の違いは全く消えてしまうのである．

このように，新しい原因把握を不死論証の結論を導く前に提示したことの意味を考えると，プラトンはいわば現実の場面に返ることを意図していると考えられるのである．そこでは，占有されるものは占有するものに既に占有されているのである[7]．解釈者たちは，このプラトンの視点を見逃しているように思われる．先に我々は，形式的には，定義から「魂は不死」の結論は出てくると指摘した．しかし，同様に結論が導かれるのは，さらにより以前の箇所に求められるのである．すなわち，不死論証の前半部において，何らかの性質を常に持っているものは，それと反対の性質を受け入れない，という原則が述べられる箇所である．プラトンは最終論証全体で「魂は生の性質を常に持つ」という言い方を避けるのだが[8]，不死論証後半部において，「占有する」の用語を導入した後で，「魂は生の性質を占有されるものに常にもたせる」という言い方を行う．しかし，形式的には，前半部において，前者のような言明を行ってしまえば，簡単に「魂は，生と反対の死を受け入れない」つまり「魂は不死」が導出できたのである．従って，「現実の場面」を注目し直すというプラトンの姿勢は，「占有し，性質をもたせる」という言い方の導入において始まっていると言う

[7] Denyer は，最初にソクラテスが提示した原因論が一見空虚に聞こえるのは，その定式化におけるある原因となる物の存在が自明である場合であると論じる．([Den], p. 89) しかし，我々の解釈では，既に現実的である（又は，あり得る）事態に関する原因が問題となっているのである．

[8] プラトンは何ゆえこの言い方を避けたのであろうか．Frede は，雪などの場合は「雪は常に冷たい」と言えば十分だったが，魂の場合には「魂は常に生きている」と言うのはいささか blatant だから，又，魂に常に生があるための「物理的又は概念的必然性」はないから，「魂は生を常にもたらす」という別の条件を導入したなどと言っている ([Fr], p. 38.)．管見では，プラトンの挙げる他の例，「身体が病になるのは熱がそれをもたらす」という例との並行性を保つためではないか．魂の場合は，「魂は生を常に持つ」と言っても不自然さはないだろう．しかし，熱の場合は，「身体が病になるのは熱がそれをもたらす」からといって，熱自身が常に病を持っているわけではないのである．

ことができよう．

最後に，Hackforth の指摘する別の論点についても言及しておこう．彼は，火の身分に関しては，魂と同様，プラトン自身揺れ動いていると言う ([Hack], p. 162)．彼は，105a1, c2 では，火は性質として扱われるが，103d10, 106a9 では，実体としての扱いを受ける，とテキストの場所を指定するが，それぞれの箇所は，次のように特徴付けられると思われる．すなわち，火が実体として扱われると言われる箇所は，「x は何らかの性質を常にもつ」という記述がなされる場面であり，不死論証前半部，及び，後の不滅論証に関わる．（不滅論証では，占有の用語は使われない．）他方，性質として扱われると言われる箇所は，「x がある事物を占有する時，それにある性質をもたせる（もたらす）」という記述がなされる場面であり，第二定義，及び，新たな原因論の記述に関わる．前者の記述における ‘x’ には，火，雪，三，魂が例として挙げられている．又後者の ‘x’ の例としては，火，熱，一，魂が挙げられている．Hackforth はどういうわけか，数（三，一）という共通に挙げられている事例を取り上げていないが，いづれにせよ，問題は同じ扱いを受けるべき同じものが前者の言い方に適用されたり，あるいは，後者に適用されるというようなことではないだろう．プラトンは前者にしか適用していない雪を，火と同様に，後者にも適用することも可能だったはずである．又，そうするとしても，別段躊躇しなかったであろう．それらの記述はともに一般的な原則を意図していると考えるのが自然である．「性質を常にもつ」を中心とする前者と「性質をもたせる（もたらす）」を中心とする後者の記述への移行には，上述のごとき現実の場面への視点の移行が伏在していると思われる．

1.2　不滅論証について

次に不滅論証を検討する．論証は以下のように進む：もし非偶数のものが不滅であることが必然であったならば，三は不滅であっただろう．又，非熱であるものが不滅であることが必然であったならば，雪に熱を近付け

た時には，雪は溶かされることなく，その場から退去していっただろう．又，非冷であるものが不滅であることが必然であったならば，冷たい何かを火に近付けると，火は消えることなく，その場から立ち去ったことだろう．(105e–106a) そして，不死なるものについて，もし不滅でもあるとすれば，死が魂に迫ってくる時に，滅びることはない．ところで，非偶数のものが不滅なものではなく，偶数が迫って来ると，確かにそれを受け入れないが，その場で滅びてしまう，と言う人に対して，それが不滅であると抗弁することはできない．火や熱の場合も同様である．不死のものについても，もしそれが不滅であると同意されれば，魂は不死であるとともに，不滅でもあることになるが，そうでなければ，又別の議論が必要になるだろうとされる．しかし，さらなる議論がなされることはなく，不死のものが不滅なのは明らかだとされる．なぜなら，不死のものが破滅を受け入れるとしたら，神や生の原理のような他に破滅を受け入れないものが考えられなくなるからである．よって，死が人間に迫ってきた時，肉体は滅んでも，不死である魂は，死にその場所を譲って，無事立ち去っていくことになる．(106b–107a) かくして，魂の不死にして不滅たることの論証が終わる．

不死論証では，（身分は異なるかもしれないが，）魂は他の諸対象と並行的に語られていた．しかし，続く不滅論証では，一転して他の事例から不死なる魂が差別化される．不死論証では，火が非冷であり，雪が非熱であり，三が非偶数であること，そして，魂が不死であることが示された．非冷である火に冷たいものが近付くと，（それを受け入れずに，）滅びるか，又は，立ち去るかのどちらかである．非冷の雪，非偶数の三，不死の魂に関しても，状況は同じである．不滅論証では，これらのうち前者の可能性のないこと，すなわち不滅であることが明らかなのは，魂だけであるとされる．なぜなら，不死なるものが不滅でないとすれば，神や生命の原理など実際不滅であるものが他に考えられなくなるからだとされる．こうし

て，不滅論証では，非冷なもの，非熱なものなどから不死なるものが，つまり，実質上，魂が差別化されるのである．

Bostock, Keyt, Hackforth は，この魂の差別化には理由がないと批判する ([Bos], [Key], [Hack])．Bostock は，「不死」の言葉の意味が，不死論証と不滅論証で異なっている．不死論証では「魂でありながら，死を受け入れることはない」ことが意図されたが，不死の通常の意味は端的に「死ぬことがあり得ない」，つまり，不滅性である．この意味での魂の不死性つまり不滅性が実質上全く示されていない，と批判する．Keyt も同様な議論を展開する．彼によれば，不死論証では，「死を受け入れないもの」として「不死なるもの」が定義されていた (105e)．すなわち，不死が「死 (*θάνατος*)」の反対として定義されていた．ところが，不滅論証では，「不死」は「死すべき (*θνητός*)」の反対の意味に変化している．プラトンの最終論証には，このような ‘equivocation’ の誤りが存する，と Keyt は批判する．Hackforth も，同様に，「不死なるものは不滅である」ことの実質的な証明がなされていないと批判する．

一方，不死論証におけると同様，不滅論証に関しても，プラトンを擁護しようとする Frede の立論をみてみよう．プラトンは不滅論証において，不滅なものとして「神や生命の原理（やその他）」を挙げる．それらに共通の性質は「本質的に生きている」ということでなければならないと Frede は言う．そして生きているものが存在しなくなるためには，それは死を受け入れなければならない．よって，「本質的に生きている」ものが存在しなくなることはできない．つまり不死なるものが不滅であることは明らかなのである．こうして，魂の不滅論証を支える前提はそれ自体成り立つものであり，従い，不死論証と不滅論証にギャップはなく，最終論証全体は形式的には正しい，と Frede は判定する．

雪に熱いものが近付くと，雪はどうなってしまうか．火に冷たいものが

近付くと，火はどうなるか．三に偶数が接近すると，三はどうなるか．そして，魂に死が迫ると，魂はどうなるか．すなわち，それぞれのものに，「互いに反対ではないのに，他方を受け入れないもの」が迫ってきた時，それはどうなるか．それは，それぞれの場合に対応するものが迫ってきた時にはじめて明らかとなるのではないか．もちろん，プラトンは明示的にそのようなことを説明しているわけではない．しかし，不死論証においてプラトンが「その時，x は滅びるか，又は，退散するか」という一般的な定式化のもとに雪，火，三，魂を並列させていたことに注意すべきである．そのように一度それらを並列させた上で，続く不滅論証で（正式な論証なしで）魂を差別化するのである．これは，雪，火，三，魂に，現実に「受け入れることのないものが迫ってくる」という試練が与えられてはじめてそれらの身分の違いが分かるとプラトンが考えていたからではないか．この解釈が正しいとすれば，ここにも正式な論証から「現実の事態」の観察への（相対的な）視点の移行が認められるだろう．いづれにせよ，解釈者たちがこだわったように，「不死」という言葉の意味をプラトンは不死論証と不滅論証とで変化させたか否かというような問題でないことは確かであろう．仮に不死の意味を問題にするにしても，Bostock や Keyt の主張したように，その意味をプラトンが途中で変化させているとはとても思えない．しかし，もし，Frede の言うように，プラトンが不死の意味を一定に考え，「不滅」を含意させていたとしても，プラトンが不死なる魂を一度他の事物とわざわざ並列させていることの説明がつかなくなるのである．

2.　プラトンにおける魂と事物との並行性

前節で我々は，不死論証及び不滅論証に関する諸解釈を批判したが，不滅論証の諸解釈に対する批判は，不死論証の諸解釈にも向けることができる．解釈者たちは，プラトンは不死論証において魂を性質として扱ったか

どうかという問題を議論していた．Hackforth は，プラトンは不死論証で魂を性質と扱っており，不滅論証での実体としての扱いとの間にギャップがあると批判した．他方，Schiller, Frede は，不死論証でもプラトンは魂をちゃんと実体として扱っており，そのようなギャップはないと弁護した．Schiller は，もし Hackforth が正しいとすると，プラトンが「魂」に関して曖昧さを持っていたことになる，と言う ([Sch] p. 53)．しかし，我々の解釈によれば，不死論証でソクラテスが様々な事物を並べる時，それらの事物の身分はまさに未決定なのである．そして，実際それぞれに「受け入れないもの」が迫ってきた時にいかなる振舞いを示すかによって，身分は決定されるのではないか．しかも，決定されるのは，さしあたり，まさに対応物が迫ってきた時に消滅するような身分であるのか，又は，消滅せず無事退散するような身分であるのかであると考えられる．プラトンにとって，（数を含めて）それぞれの事物が実体か性質かといった問いは念頭になかったように思われる[9]．この世界を見渡した時，それぞれの事物は，それ自身が受け入れないものに迫られる体験を持つという点で，共通しているのである．その時，実際結果はどうなるかによって，それぞれの身分が決定される．そのように解釈してはじめて，不死論証でのさまざまな事物の並列，そして，不滅論証での魂の差別化というプラトンの論の進め方が有意味になるのである．

管見の及ぶ限り，不死論証そのものの意義をかろうじて見出しかけているのは，Frede のみである．もっとも Frede は，魂の身分も不死の意味も，不死論証と不滅論証とで変化していないとする立場であるから，不死論証における魂と他の事物との並行性に意味を見出せないでいるというの

[9] Sedley は，『パイドン』の原因論を分析する中で，プラトンは形而上学的に異なった種類の事物を区別することにいささかも興味を持たなかったと言っている ([Sed], p. 115) が，同意できる．しかし，何かが原因たりうるかの成否は，ただそれの結果との論理的または準論理的関係に関係するとの見方には同意できない．

が実情である．しかし，プラトンが実際に不死論証において，さまざまな事物を挙げている以上，そこには何らかの意味があるはずだと思い始め，次のように言う．すなわち，火や雪のような実体的なものの例にプラトンが絶えず戻ってくるのは，「さまざまな事例の間のまさにアナロジーが，彼の議論にとって必要だと彼（プラトン）が考えていたことを示唆している」（傍点は引用者による）(he thought that no more than an analogy between the various cases was necessary for his argument. [Fr], p. 34)．しかし，この「アナロジー」自体の考察に向かうことなく，次のように言ってしまう．すなわち，「彼のモデルの適用可能性がいかなる特殊な事例にも依拠していないことを示すために，かなり意図的に，これら異なった種類の例を選んだ可能性がある」（傍点は引用者による）（he may have chosen these different kinds of examples quite intentionally in order to show that the applicability of his model did not depend on any specific case. 同所）．つまり，Fredeにしても，さまざまな事物の「存在論的身分 ontological status」（同，p. 35）の違いが優先されており，「アナロジー」の積極的な意味を問うことはなかったのである．むしろ，彼は続けて，このアナロジーによって，プラトンが一貫して「迫る attack」「占有する occupy」「退散する retreat」などの軍事的メタファーに固執した事実がうまく説明できる，と言う．火や雪の場合は，それらはほとんど文字通りの意味 (an almost literal sense) に理解されうるが，性質の場合には，その正確な意味 (its exact meaning) が解し難い．こうして，プラトンは，比喩的な語り方によって，いかにして性質が，占有する対象を引き継ぎ (take over)，所有し (possess)，去る (leave) かという問い，「退散する」「消滅する」が正確に何を意味するかという問いを回避することができた，と主張するのである．

しかし，「占有する」「退散する」がメタファーだと言うのであれば，Fredeの言う「所有する」「去る」はどうしてメタファーではないのか．

そもそも，「占有する」「退散する」をメタファーとするような立場は，プラトンが一貫して反対した，感覚できる物体（だけ）を真の存在とするような物体主義の立場とどう違うのか．この立場は，後の『ソフィスト』や『テアイテトス』で正式に反論されるが，『パイドン』のソクラテスが回想する当時の自然学と明らかに通底するものでもあろう．プラトンはまさに，あるものが実際占有したり退散すると考えていたと思われる．

Fredeの論じ方に見られたように，多くの解釈者は，プラトンが不死論証において，魂だけでなくさまざまな事物を挙げることに対して，単なるアナロジーと考えた．つまり，ちょうど雪が非熱であり，三が非偶数であるのと同じ様に，魂は不死である，とプラトンは論じていると多くの解釈者は読解したのである．しかし，それは誤読である．不死論証を何らの先入観を持たずに読めば，そこでは，魂と他の事物がまさに並列されていることに気付くはずである．魂が不死であることをただ分かりやすく説明するために，類比的な例を挙げているのではなかったのである．そこに身分の違いはなく，ただ並べられているのである．

以上で我々の見てきた解釈者たちは，何らかの固定された言葉の意味理解や存在論的観点を前提にし，その前提に合わない論証や議論を「メタファー」や「アナロジー」として切り捨ててしまう傾向にあるように思われる．しかし，プラトンにとって大事だったのは，まず新鮮な気持ちでこの世界を見直してみることである．そして世界の成り立ちをはっきりとしたロゴスで表現する，あるいは，世界の構造をロゴスによって探究することがプラトンの課題（の一つ）であった．世界を見渡した時，魂も事物も何らかの仕方で形相に関わっているのである．そして，それぞれは「受け入れられないもの」に迫られる体験を持つという点でも共通しているのである．

3.　プラトンの世界理解とロゴスによる探究

さて，これまで我々は，不死論証においては，魂とそれ以外の事物が並

列されており，続く不滅論証では一転して魂が差別化されることの意味を解釈してきた．その変化は，実際に「受け入れることのないもの」がそれに迫ってきた時の結果如何によると解釈してきた．プラトンはそこで現実の世界を参照するのである．そう解釈することによってはじめて，不死論証における並行性と不滅論証における魂の差別化というプラトンの論じ方が十分理解できると主張してきた．ここで我々は，より慎重になってみよう．すなわち，結局，そのような解釈をとるにしても，不死論証と不滅論証とでは，何らかのギャップがあることになるのではないか.「不死なるものは不滅である」ことの正式な論証はやはりないのである．言い換えると，魂を他の事物から差別化することの根拠が正式には述べられてはいないのである．そもそも，プラトンの最終論証において，現実の世界へと視点が移行するというようなことが，果たして許されてよいのだろうか．プラトンは,「魂の不死にして不滅である」ことをまさに論証しようとしていたはずである．ソクラテスは若かりし頃の自然学探究の中で，アナクサゴラスの書物に失望した後,「第二の航海」として，事物を逃れて，純粋にロゴスの中で原因の探究を行うことを宣言する[10]．ちょうど肉眼で太陽を観測しようとすると眼を損ねてしまう人がいるように，直接事物を見たり触れたりすると，魂は盲いになってしまう恐れがある．そこで，水などに太陽の姿を写した上で，それを見るのと同じように,「ロゴスへと (*εἰς τοὺς λόγους*) 逃れて，その中で，存在するものの真実を，考察する必要があると私には思われた」(99e4–6) と言う．そして，形相が存在することを前提として，形相の分有を核とする原因把握を提示するのである．

これを後に提示される新しい原因把握と比較してみよう．新しい原因把握では，例えば，あるものが熱くなる原因として，以前の答え方のよう

[10] 魂の不滅性の最終論証は，このソクラテスの若い体験の告白から始まっている．そこから,「魂は不滅」の結論が導かれるまでの話の展開はきわめて自然なものであり，どこで経験の告白が終わっているかは決めがたいであろう．

に，熱を挙げるのではなく，その中に火が生じるからと答えるのである．同様に，身体が病むようになるのは，病が，ではなく，熱が生じるからと答えることになる．多くの解釈者は，この新しい原因の答え方は，以前のそれが持っていた普遍性を失っていると批判した ([Ros] p. 33, [Hack] p. 161, [Bos] p. 189)．例えば，ものが熱くなる原因は火だけとは限らないだろう．又，身体が病む原因も熱だけではないだろう．つまり，新しい方の理解では，原因は問題の事態の「十分条件」ではあるが「必要条件」ではなくなっているというわけである．（この「十分条件」,「必要条件」の言葉遣いは Bostock のものである．）しかし，Bostock も指摘するように，テキストでは，身体が生あるものとなるのは魂が生じるから，と対話相手ケベスが答えると，ソクラテスは「常に，その通りであるのか」と確認を入れている．つまり，魂の場合は，それが身体の生の「必要十分条件」であることを確認する労をとっているように見える．その限りにおいて，プラトンは新しい原因把握でも，普遍性を指向していたと言える．しかし,「身体に生が生じるのは，そこを魂が占有するから（しかも，それ以外の原因はない)」ということは，魂による生を伴った身体と生を示さない事物との比較を通じてはじめて言える真実ではないだろうか．プラトンはそう考えたのではないか．もちろん，プラトンにとってもロゴスの中で探究するのは，あくまで，そこに写される世界の姿である．しかし，以前の原因把握の場合より相対的に，現実世界の観察に依存していると言えるだろう[11]．

以上の議論を念頭において，あらためてプラトンの「最終論証」全体を

[11] ただし，前の原因把握が普遍的な法則であった，というような言い方をし，そして場合によっては，それを称賛すること自体には，私は懐疑的である．そのような見方は,「イデア原因論は同語反復に過ぎない」というようなよくある批判と同質の考えではないだろうか．プラトンはその原因論によっても，確かに，この世界について何ごとかを語ろうとしているのである．ここで私が同意したのは，せいぜい，新しい原因論と比較した場合に，現実への依存度がより低いというに過ぎない．

見直してみよう．すると，「論証」が進むにつれ，現実世界の観察への依存の度合いが徐々に高まっていくことが看て取れるであろう．まず最初の原因論が述べられた後，不死論証の前半部において，形相どうしだけでなく，反対の性質どうしも，互いに他方を受け入れない．例えば，大そのものだけでなく，人間や事物の持つ性質としての大も，大のままで，小になろうとはしない．又，火は常に熱さの性質を持つが故に，「熱い」と呼ばれるべきである．ここまでの議論は，純粋にロゴスの中での真実が語られているように見える．ただし，形相そのものではなく，この世界にある対応する性質に目を向けていることに注意しておこう．次に，不死論証の後半部において，「占有する」の用語を導入し，「反対ではないが，互いに他方を受け入れないもの」の定義が二度試みられる．第一定義の前に，三の例が挙げられ，その上で，それらがいかなるものかを定義してみようとソクラテスは言っている．つまり，ここで一般的な定義が試みられていることは明らかであろう．（Schiller は，第一定義を，その前後で言及される三の事例に特に合致するように解釈しようとしていた．）そして，新しい原因論が述べられる．例えば，物が熱くなるのは，それを火が占有するから，又，身体が生あるものとなるのは，それを魂が占有するからとされる．（テキストでは，この原因論に「占有」用語は使われていない．）これらの把握も，世界の特定の場面を描写しようとしているのではない．しかし，やはり，現実世界において，実際物が熱くなったり，身体が生きている場面が先にあるのであり，その原因は一体何か，をあらためて問おうとしているのである．しかも，先に古い原因論との比較によって明らかとなったように，相対的に，ロゴス上の分析からの逸脱が大きいと言える．そして，定義と原因論から，雪が非熱であり，三が非偶数であり，又，魂も不死とされる．そして，不滅論証では，（先に示した我々の解釈によれば，）実際に雪に熱いものが，三に偶数が，魂に死が近付くという試練を経た後，消滅するかしないかによって，まさに不滅のものか否かが決定さ

れるのである．

このように，プラトンの最終論証では，純粋にロゴスの上で探究すると言われながらも，不死論証の各ステップ，不滅論証を経て，徐々に現実世界の事態への依存の程度が高くなっているのである．従って，我々がプラトンを批判するとすれば，この『パイドン』の段階では，世界理解とロゴスがうまく調和していないという点になるだろう．いわば，自分の世界把握にロゴスが追い付いていないのである．そして，懸命に追い付こうとしてはいるのである．例えば，不滅論証において，結論を得る際，プラトンは「もし不死なるものが不滅でもあることが同意されるならば」と三回繰り返している．これは，議論の実質上のギャップを形式的に埋めようとしていると解釈できよう．しかし，『パイドン』の段階において，最終論証の不死論証と不滅論証との実質上のギャップは埋めようがないと思う．（従って，そこに何らかのギャップがあるという点では，結果として多くの解釈者と意見が一致する．）最終論証の後，ソクラテス自身が，毒杯をあおぎ，死という試練を経験することになる．示唆的なのは，プラトンはその様子を，ソクラテスが息をひきとるまで描写していることである．ソクラテスはたじろぐことも苦しむこともなく，最後を迎えるが，それを描写するプラトンの筆致も冷静である．これは，雪や三などと違い，魂は不滅だということを実際に示そうとしたとも解されるのではないか．もちろん，「魂は不滅」の「論証」は終わっているはずなのだが，その実質上のギャップを埋めるための描写と解釈するのは，やや強引に過ぎるだろうか．

4. 『パイドン』以降のプラトンの魂論の発展について

我々の分析した『パイドン』の魂の不死かつ不滅のための「最終論証」では，前半の不死論証で非熱の雪や非偶数の三などと並列された不死なる魂が，後半の不滅論証になると，一転他の事物と差別化された．その差別

化とは，挙げられた他の事物は不滅であるとは言い切れないが，魂は明らかに不滅である，というものであった．我々は，その差別化はやはりロゴスによる論証という観点から見れば，一つのギャップであること，しかし，そのギャップは，多くの解釈者たちが論じたような不死の意味や魂の存在論的身分の変化などでは決してなく，プラトンの現実世界への視点の移行であることを論じた．すなわち，魂の不滅は，実際に死が近付いた時の結果から言えることであった．しかも，そのような現実観察以外の何らの思考から言える事柄ではなかった．しかし，『パイドン』の段階のプラトンは，現実世界における魂や他の事物の観察とその観察結果をともにうまく表現できるようなロゴスをいまだ探しあぐねていたと言える．すなわち，不死なる魂が不滅なのは「現実にそうだから」とプラトンが考える時，どうして現実はそうなるのかについてうまく説明できないでいたのである．

最後に，以後の（中期の）プラトンが魂論を洗練させる過程において，この迷いをはっきり乗り越えるという解釈の可能性について簡単に指摘して本稿を閉じよう．具体的には，次の 2 点を提起してみたい．

(1) 『パイドン』に続く『国家』第 X 巻における魂の不滅論証（608d 以下）において，『パイドン』では曖昧であった，現実観察とロゴスによる探求がはっきり区別される．しかし，その間の乖離がいまだ存する．

そこでは，『パイドン』におけると同様，まず魂とほかの事物が並列される．（ここでも，何らかの魂の本性を最初に前提せず，まず現実観察において諸事物を並べるということをプラトンが重視していることがわかる．魂であれ，何であれ，ある基準を満たせば，不滅と結論されうる訳で

ある.）そして,「もしそれぞれのものに固有の害悪がそれを襲っても，取りつかれたものが滅亡することはないことがわかるならば，我々はそれの不滅たることを知ることになる」とされる[12]．しかし，不正，放縦，怯懦，無知といった魂に固有の害悪が，魂を滅亡させることはないことについては，特に議論されることなく，対話者間で同意され，魂は不滅であるとされる．この議論は,『パイドン』の最終論証における結論の導き方と似ている．しかしながら，ここでは,「もしも……がわかれば (εὑρίσκωμεν), ……を知ることになる (εἰσόμεθα)」という形になっていることに留意しよう．ここに,「魂はいかなる害悪によっても滅びることはない」という前提に関しては，不正などの悪を実際に魂が経験した際の結果如何によって初めてわかる，というプラトンの考えが現れていると言えるだろう.『パイドン』における方がむしろ純粋にロゴスの上での議論を指向していると言える[13]．事実，プラトンははっきりと「現実における魂」と「魂の本来の性質」を区別するのだ．そして，魂がいかなる本性を持っているかについては，さまざまな害悪から解放される時，思惟の力によって観取できる，とされる．(611b–c) しかし，ここでも，依然として「魂は不滅」を導くその仕方には，あるギャップが認められよう．（他の事物と違って）魂は不滅だとするその差別化には,「現実にそうだから」というほどの根拠しか述べられてはいないのである．そして，魂の不滅が分かった時点ではじめて，その本来の姿を，思惟の力によって，つまり，ロゴスによって探究することができるのである．すなわち，いまだ現実把握とロゴスによる把握とにはある乖離があるのである．現実世界の観察と，ロゴスによる魂の本性の把握とをはっきり区別することによってかえって，そのギャップを埋めるための準備が整ったと言える．つまり，プラト

[12] これは 609b4–7 の直接的な訳ではなく，その要約である．

[13] 実際,『パイドン』では,「不死なるものが不滅であれば」あるいは「不死なるものが不滅であることに同意され (ὁμολογεῖται) れば」という形になっていたことを想起しよう．

ンはギャップを自覚し始めたと言える．その意味において，現実世界の観察に依拠しながら，すべて純粋にロゴスによって論証しようと模索していた『パイドン』の時期よりも，確かに進展していたのである．

(2) 『国家』に続く『パイドロス』における魂の不死論証（245c 以下）では，現実世界における魂と事物との並行性，及び，魂の本性の記述が統一的な枠組みによって説明される．ここにおいて，世界把握とロゴスによる説明とのギャップが埋められる．

そこでは，プラトンの世界観察において，動くものに焦点が当てられる．そして，動くものにも，他のものによって動かされているものと，自身の力で動いているものとがあるとされる．この両者は，互いに異なったものであって，後者は前者にとって始源となっており，後者は不滅である．しかも，前者は魂のない無生物である．他方，後者は魂を持つ生物であり，常に動いており，動くのをやめることはない．かくして，ソクラテスは，魂の本性とは，それが自己自身により動かされることと喝破する．(245e)

さて，ここに至って，『パイドン』や『国家』の諸議論に見られたような現実観察とロゴス表現との間のギャップは最早解消されていると言ってよいだろう．しかも，現実における事物（物体）と魂の並行性も保持されているのである．まず，現実世界においては，物体も魂も動くのである．同じく動くものとして，物体と魂とを並列させている．以前の著作では，次の段階として，魂を差別化する根拠をうまく表現できないでいた．今や，自己自身の力で動くことを魂の本性とすることによって，他によって動かされる物体から魂を区別するのである．しかも，動という視点は既に並列関係の記述の中に埋め込まれている．すなわち，動くものという把握の基に，両者を並列させ，しかも，その動くものの内に，動きの動因がど

こにあるかによって両者の種類を分けるのである．

かくして，我々の読解によれば，『パイドン』の最終論証にみられたある種の混乱は一応の解決に至り，『パイドロス』において魂の本質規定が与えられる．逆に言うと，後の『国家』，『パイドロス』編における魂をめぐる諸議論から，『パイドン』の最終論証を見直すと，プラトンの未整理な部分が浮かび上がると言える．『パイドン』は『弁明』などとともに，ソクラテスの生き方とその生の終え方に若い頃衝撃を受けたプラトンが，そのことの意味を受け止め，解釈し，叙述しようとした結果であった．そのような著作が，プラトンの魂論，ひいては，自然哲学の発展の出発点となっていることがいささかなりとも示されたことを期待しつつ，本稿を閉じたい．

参考文献

[Arc]　R. D. Archer-Hind, *Phaedo of Plato*, Second edition, London, 1894.

[Bl]　R. S. Bluck, *Plato's Phaedo*, London, 1955.

[Bos]　D. Bostock, *Plato's Phaedo*, Oxford, 1986.

[Bur]　J. Burnet, *PLATO Phaedo*, Oxford, 1911.

[Fr]　D. Frede, 'The Final Proof of the Immortality of the Soul in Plato's *Phaedo* 102a–107a', *Phronesis*, 23, 1978, pp. 27–41.

[Gal]　D. Gallop, *Plato Phaedo*, Oxford, 1975.

[Hack]　R. Hackforth, *Plato's Phaedo*, Cambridge, 1955.

[Key]　D. Keyt, 'The Fallacies in *Phaedo* 102a–107b', *Phronesis*, 8, 1963, pp. 167–172.

[Den]　N. Denyer, 'The Phaedo's Final Argument', in Dominic Scott (ed.) *Maieusis: Essays in Ancient Philosophy in Honour of Myles Burnyeat*, Oxford University Press, 2007, pp. 87–96.

[O'B]　D. O'Brien, The last argument of Plato's Phaedo, *Classical Quarterly*, 17, 1967, pp. 189–231 (I) and 18, 1968, pp. 95–106 (II).

[Ros]　D. Ross, *Plato's theory of forms*, Oxford, 1951.

[Sch]　J. Schiller, '*Phaedo* 104–105: Is the Soul a Form?', *Phronesis*, 12, 1967, pp. 50–58.

[Sed]　D. Sedley, ‘Platonic Causes’, *Phronesis*, 43, 1998, pp. 114–132.
[Tr]　H. Tredennick, *Last Days of Socrates*, New York, 1961.